

《定住促進》

とぼし
三重県鳥羽市「海辺のまち鳥羽出逢い応援事業」



とぼし 三重県鳥羽市 「海辺のまち鳥羽出逢い応援事業」

出逢い交流事業を通じた地域活性化

若者流出の漁業のまちで10年来お見合い活動を実施 カップル成立で定住促進

三島由紀夫の^{しおさい}「潮騒」の舞台となった、鳥羽市の神島。鳥羽港からわずか40分という距離にあるにもかかわらず、独特の文化や風習が色濃く残る漁業の島だ。それと同時に、文学ファンやドラマのロケ地巡りをする観光客が訪れる観光の島でもある。

しかし、神島を含む4つの離島には高校もなく、若い人が働く場も決定的に不足しており、いずれの島でも深刻な人口流出に苦しんでいる。

「漁師をやっているとどうしても出会いがない。花嫁さがしを本人達だけに任せていても埒があかない——」

島の有志で始めた花嫁探しサポートが、やがて4つの島全体の取り組みになってゆき、ついには漁協や鳥羽市を動かすまでに広がりを見せる。

都会から島に嫁いでくる女性たち、奮迅するコーディネーター、島の青年たち。取り組みに関わる様々な人たちがかける思いとは——？



◆取り組み概要

●取り組みの目的

過疎化の進む離島の漁村男性に女性と出会う場を提供することで、人口減少を食い止める

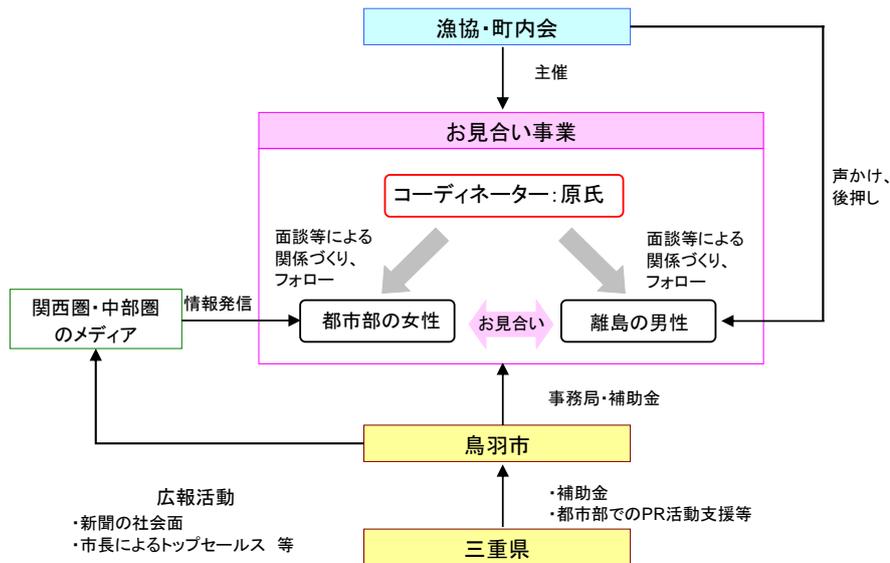
●取り組みの内容

都市部の女性を対象としたお見合い事業を実施

●取り組み主体

- ・ 鳥羽磯部漁業協同組合
- ・ 町内会
- ・ 原康久氏（コーディネーター）
- ・ 鳥羽市役所
- ・ 三重県庁

◆取り組みの体制



◆取り組みのポイント

1. 相手の立場に立って考えるキーマンの存在
コーディネーター原氏により、参加者との丁寧な関係づくりにより成婚率がアップ。
2. 冷やかしは無し！
コーディネーターと都市部の女性との綿密な面談、県との連携による広報活動の工夫により「婚活」イベントと一線を画す。
3. 市を挙げてのバックアップ体制
市の人口減少対策としての意義を認め補助金や事務局機能を担うほか、市長のトップセールスにより広報活動を支援している。
4. 体験機会の提供
漁船への体験乗船など、結婚後の暮らしを十分に理解してもらう機会を提供している。
5. 地域を支援する組織の存在
漁協や町内会が主催することで、人材の確保、顔見知りによる参加の声かけが可能に。

取り組みによる成果

- ・ 1990年から86組の結婚が実現した
- ・ 子ども数の増加により複式学級が廃止された
- ・ 花嫁たちにより、観光の取り組みが行われるようになった

今後の展望

- ・ 離島から市域全体への取り組みの拡大
- ・ 「海辺のまち鳥羽出逢い応援事業」として、商工会議所、漁協、農協、観光協会、自治会連合会による実行委員会を設置

鳥羽市の概況

4つの有人離島を有するまち

鳥羽市は、三重県南東部志摩半島に位置し伊勢湾に面した、全国的にも有名な文化・観光資源を多く有するまちである。

市内には水産業、観光業が活発な4つの有人離島（神島、答志島、菅島、坂手島）があり、今回紹介する取り組みの主な舞台となっている。

4つの有人離島の概況

4つの離島の基幹産業はいずれも漁業でありカタクチイワシ、シラス、サバなどがよくとれる。ただし漁業への依存度は島によって異なり、例えば菅島では第一次産業よりも、第三次産業の従事者のほうが多く、サービス業従事者と卸売・小売・飲食業が多い。また近年は出稼ぎ人や、給料生活者が段々と増えているのが実情である。

高齢者を敬う文化があり、また共同体としての結束力が必要な、昔からの祭りや通過儀礼も多い。町内の行事は漁協・町内会・青年団等によって運営され、住民の結びつきはきわめて強く、独自の生活様式も生み出している。その一つとして答志

島には「寝屋子」という制度があり、鳥羽市の無形文化財に指定されている。

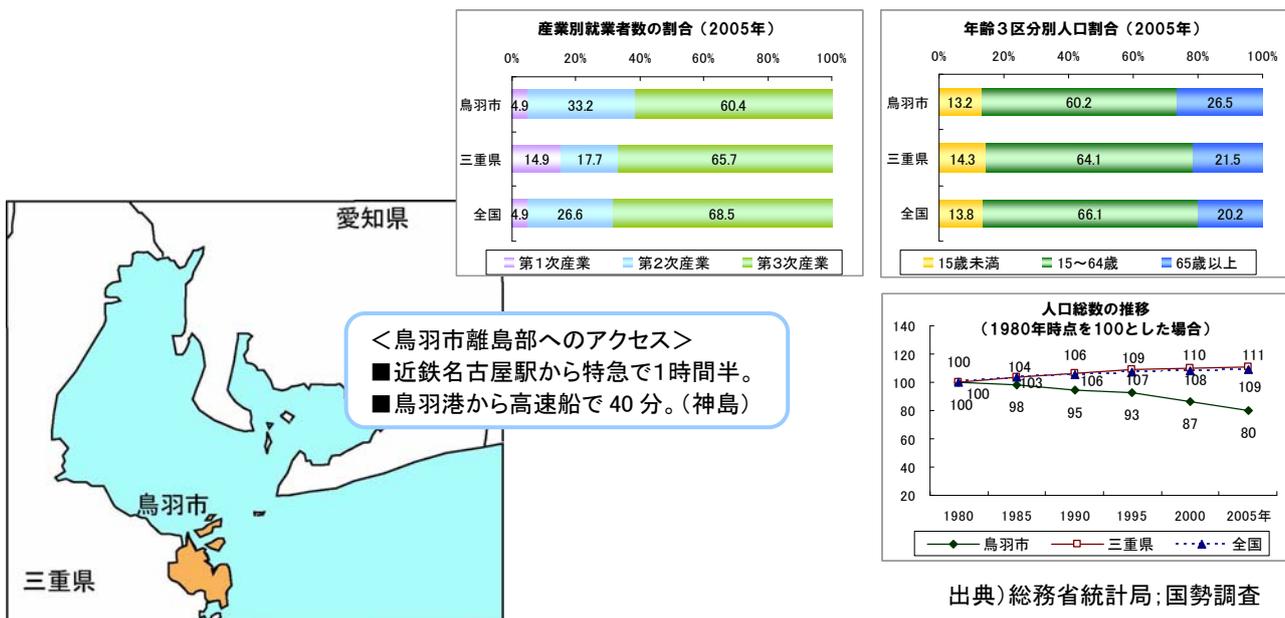
またいずれの島でも、特に漁業従事者の場合、長男は跡継ぎとして島に残れるものの、次男、三男が島内でできる仕事が少ないことも人口流出に拍車をかけている。

取り組みに至る経緯

お見合い事業で地域の存続を

取り組みは菅島から始まった。当時菅島では、子どもの出生数が減少する傾向にあり、1989年に、ついに子どもの出生数が一桁台になってしまった。出生数減少の背景として、島内で結婚するカップルが少なかったことが挙げられ、平均して年間数組、年によっては全く結婚のないこともあったという。

島には高校が無く、一日10便の市営定期船だけが鳥羽本土との唯一の交通機関であり、子ども達は中学校を卒業すると鳥羽本土や伊勢市、名古屋などの高校や専門学校へ進学し、そのまま島外の利便性の高い生活や、漁業とは別の仕事を求めて島に戻ってこないことが多い。



出典) 総務省統計局; 国勢調査

特に女性は、海女と観光業のほか、ほとんど仕事がないため、島に戻りたくても戻ってこれない事情がある。それでも、昭和40年代ぐらいまでは、鳥羽市の地元の男女同士が結婚するケースが多かったが、その後、京阪神や名古屋などに就職する女性が増え始め、花嫁不足が深刻になってきた。そして、漁師は女性との出会いが少なく、独身男性が増えていった。

このままでは、高齢者が大半を占める集落となってしまう、漁業そのものの維持も困難となる。こうした実態に危機を感じた菅島の町内会が取り組んだのが始まりとなる。

そうしたなか、山口県下関市の^{ふたおいしま}蓋井島でお見合事業を実施し、成功したことを町内会のメンバーが新聞で知り、島外の女性との交流イベントを実施したところ、2組のカップルが誕生し、結婚に至ったのだ。

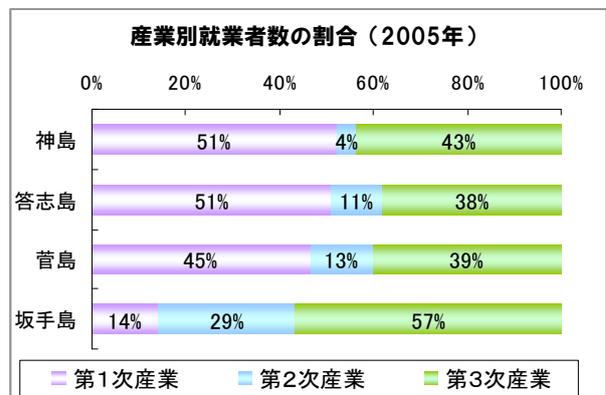
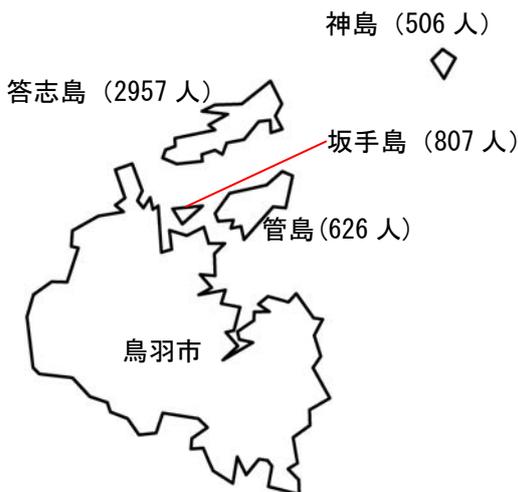
活動は、離島4島へ拡大

お見合い事業に現状からの脱出の可能性を見いだしたことにより、その後答志島の町内会、答志島の^{もちとり}桃取漁業協同組合、神島漁業協同組合と活動が広がっていった。そして1994年には各島の青年層が^{とうらくかい}参画し「島楽会」という会を立ち上げ、

離島4島が共同で実施することになる。鳥羽市は、地域のこういった取り組みに対して、1990年から補助金を出すなどの資金面と、広報活動、県との調整といった事務局的功能で支援をするようになった。

こうした町内会や漁協の取り組みとは別に、菅島では、1996年に菅島の漁業者を中心とする独身男性18人で、男女の交流の場づくりの会「アネストクラブ」を結成、町内会の活動から引き継いで同様の取り組みを実施してきた。「アネスト＝Earnest」という「まじめな、本気の」といった意味をもつこの言葉を会の名称につけることで、会員の真剣さが伝わってくる。以来、年2～3回、アネストクラブが主催となって花嫁募集イベントを開催してきた。

こうして、有志の活動から始まった取り組みは、徐々に規模を広げ、漁協や行政など、公的機関へも広がった。それに会の名称も、三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台が離島の一つである神島であることから、2004年より「潮騒の集い in 鳥羽」となり2008年まで実施されている。



出典) 総務省統計局; 国勢調査

↑ 一口に離島4島といっても島ごとに特徴があり、島の人口、面積もまちまちだ。

神島、答志島、菅島は約半数が漁業に従事する漁村であるが、神島では4割以上が第3次産業に従事している。また坂手島は鳥羽港の東約0.6kmに位置し、本土と最も近く、定期船の便数も一番多いため、本土への通勤する製造業従事者が多い。

コーディネーターとの連携によるお見合い事業の実施

2000年に、地域興しマイスターの原^{はら}康久^{ちひさ}氏を招聘し、お見合い事業のコーディネーターを依頼した。原氏は、それまでも農林水産分野での地域興しの観点から離島での講演会やコーディネート活動を実施してきており、その縁などからこの事業のトータルコーディネートを引き受けることとなった。

島楽会を設立し、活動を4島合同での取り組みに広げ、そして2002年に鳥羽市16漁協と志摩市磯部町^{しましそべちょう}(旧志摩郡磯部町)6漁協が合併し、鳥羽磯部漁業協同組合となって、以降漁協の主催で実施されてきた。



↑ 神島の集落

海から立ち上がる独特の地形のせいで、島の集落は斜面に張り付くように家が軒を並べている。集落内には昔使われていた井戸や、古い時計台の跡等、かつての暮らしを偲ばせるものがたくさん残っている。

取り組みのポイント

相手の立場に立って考えるキーマンの存在

原氏は、男性・女性双方との事前の面接をかなり綿密に行う。ここで結婚を真剣に考えているかを確認し、また女性の場合、離島での生活に順応できるか、そうしたことを確認するという。その後、漁業体験などで交流した後、双方の意向を丁寧に確かめ、カップル誕生まで導く。

原氏がコーディネーターとして関わることになって、成婚率がある程度確保できているという。毎年行われる活動であり、対象となる男性も、積極的な人は成婚していくことで抜けていき、どちらかといえばおとなしい人が残っていく。そうしたなかで、成婚率を毎年ある程度確保するための工夫が必要ということだ。

相手の立場に立って考える。こうした相手を大切に考える姿勢がこの活動を成功に導いている。

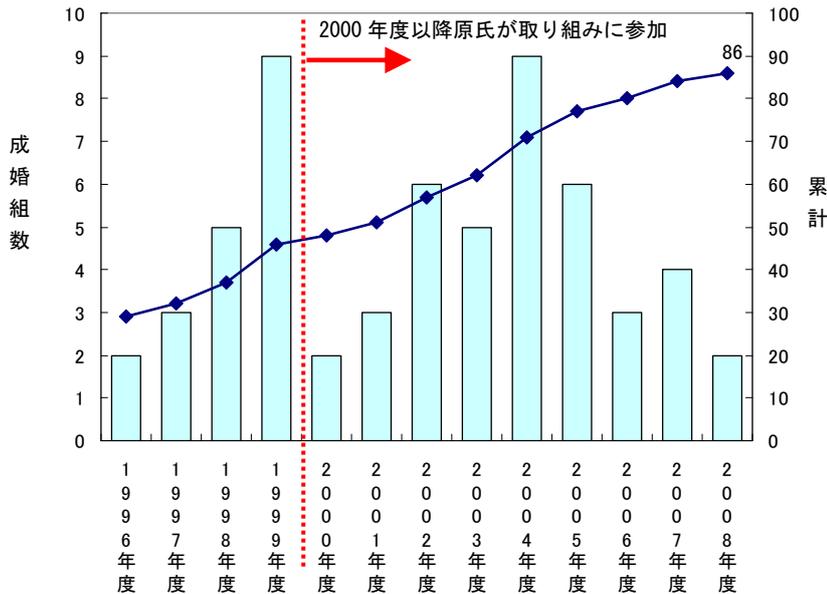
時には、一度のお見合い会でカップルが成立しなかった女性でも、離島での生活に順応できる、何か新しい取り組みが出来そう、と感じられる女性には、積極的に声をかけて次の機会をセッティングしている。その結果、運命の人と出会った女性もいる。

↓ 島と本土をつなぐ市営定期船

島と本土を行き来するには市営定期船を用いる。鳥羽港からわずか数十分の距離にあるが、外海を航行するために、風の強い日はかなり大きく揺れたり、台風時には欠航することもある。



花嫁対策事業の実績



出典)鳥羽市資料

←花嫁対策事業の実績

1990～1995年度の実績27件をあわせると、約20年間で成婚件数は86件を数える。成婚女性の出身地域は県外と県内が半々程度。県内から来る女性は三重県北部の方が比較的多いという。

↓全国で約100箇所ある「恋人の聖地」のうち1箇所は神島にある。海の見える展望台のプレート



冷やかしは無し！

お見合いイベントには、冷やかし半分の参加も多い。手間が掛かるが、参加を希望する男性と女性全員の面談を行うことで、その真意を見抜く。そして、女性の家庭状況や趣味、人生に対する考え方などをじっくり聞く。この取り組みでは、面談で参加者が絞られるという。関西での面接は三重県の大坂事務所を活用しており、県とのきめ細かな連携により、参加者との密なコンタクトができています。

そのため、参加者募集のための広報活動も念入りに計画して取り組んでいる。民間事業者がしばしば実施している「婚活」イベントと一線を画すため、民間雑誌や新聞への広告という情報発信はせず、中部・関西方面の新聞各社に対し、市長や

実際にお嫁入りしてきた女性とともにPRキャンペーンを実施、社会面での記事にしてもらっている。結果として、新聞を日々購読しているような女性からの申し込みや、両親等の勧めで申し込まれる人が多い。

市を挙げてのバックアップ体制

前述したように取り組み当初より市が人口減少対策として意義を認めて補助金や事務局機能を担っているほか、市長のトップセールスの実施によって、新聞やラジオ番組へ露出したり、事前面接に県の施設を利用したりと、鳥羽市、三重県をあげての取り組みに対するバックアップの姿勢が、他の地域でのお見合い事業との違いを生み出しているといえる。

Point 効果的な広報の仕掛けとは？

新聞の社会面で記事にもらうことの意味は、この事業においてとても大きい。ただ、毎年同じ内容で新聞各社を回っても記事にされるとは限らない。市長によるトップセールスや同じ課題を抱えている他市町村と合同で行く、またコーディネーターである原氏の人脈でNHKに取り上げてもらう、など、様々な機会・工夫をこらして記事にもらっている。メディアも記事を探しているの、ラジオなど飛び込みの取材にも、すぐ対応できるようにしている。



地域人材ネット
登録者

コーディネーター
はらみちひさ
原康久 氏



総務省地域人材ネット登録者として、鳥羽市のほか、南伊勢町などで取り組みに関わる。「今ブームの婚活ではなく出会いを通じた地域活性化こそが本来の目的」と、熱く語ってきかせる。

「地域の人たちの元気をつくる」

Q. どんな意識で取り組んでおられますか？

地域活性化の手伝いを色んな形でやってきたのですが、行き着くところはやはり、地域の人たちの元気をつくることです。地域交流とは何かということからスタートしてしまうと、どうも軽くなる形で終わってしまうのですが、人間とはというなかで一番基本の、男と女が啓発し合いお互い成長し合うところから考えていくと、こんな形（定住を念頭においた新しく真剣な出逢いの場）になるのではないかと考えています。数でやろうとするのを見ると、セットを作ればよいということに目的があるので、地域興しという部分に目的がないと思います。数で評価するべきではないでしょう。テレビの取材をお断りしているのは、面白おかしなイベントではないからです。

Q. 参加する人はどんな心構えが必要ですか？

自分から女性にアプローチ出来る男性はすでに結婚しています。こうした場に参加する男性は、鳥羽のことを頭に叩き込んで、女性から訊かれたら何でも質問に答えられるぐらい、話題が作れないと。それは経済力、生活力の表れとみられます。男性の参加者はもっと勉強が必要ですね。女性は、本心から結婚したいというのが分かる人しか来てもらわない。男友達が欲しいという軽いノリはお断りです。

Q. 嫁いだ女性達に期待されることは？

嫁いだ方たちが、10年位経って、やっと子育ても一段落し、島のことが分かって来たと思いますが、その嫁いで来た女性たちからみて、もっと良くなると思えること、これはすごいと思うことなどを、島の人や当該の地域に発信してもらいたい。そのために、女性同士の横の交流機会が必要だと思っています。

体験機会の提供

花嫁は関西からの人が多く、嫁ぐまで魚をおろしたこともなかった人、都市部に住んでいて密度の濃い近所づきあいの経験が少なかった人等、離島である意味覚悟が必要な生活に誰もが不安な気持ちを抱える。

地元の生活習慣や仕事などを、あらかじめきちんと情報提供することは必須である。そうしたことを理解した上で、納得して嫁いでもらうことが、定着につながっていく。

地域を支援する組織の存在

鳥羽磯部漁協の存在は大きい。漁業協同組合は、漁業の振興のためにある組織だが、ここでは、冠

婚葬祭の支援なども含めて幅広く住民の生活を支える活動をしている。

各島個別に取り組みをしていた時期もあるが、島民だけでは、人数も限られ、継続的なイベントの実施に必要な資金や人を集めるための広報活動などはなかなか難しい。

漁業協同組合が、後継者の育成や漁業の振興という目的に、後継者確保を含んで取り組んでいることが素晴らしい。

取り組みをすすめるにつれて島の人々の評価も変わってきた。「魚と油を売るだけが漁協の仕事」と最初は冷ややかな目で見られたこともあったというが、島の外から花嫁が来るようになるにつれ、「よくぞやってくれた！」という賞賛の声に変わっていったという。

Point 顔見知りの声かけによる参加促進

漁協は、お見合いの会に参加する男性の確保にも力を発揮する。意外にもこうしたお見合い活動の場に参加する男性は少ないようだ。女性は積極的に参加する人が多いが、男性はなかなか腰が重い。そもそも女性にしても、離島や漁業者の生活の実態を知っている県内の女性より、県外の女性の参加がほとんどである。男性は市内在住者であることもあり、うまくいかなかった場合への不安などが先立つようだ。そこで、独身漁業者を個人的に知っている漁協の職員が、「参加してみれば？」と後押しをする。顔見知りの関係があるから、こうした声掛けも可能なのである。



花嫁さん

かまた ゆかり
鎌田由加里 氏

6年前にお見合いに参加し、漁師の家に嫁ぐことになる。「軽い気持ちで」と本人は語るが、コーディネーターの原氏は、彼女の真剣な気持ちを初対面で見抜いたという。右側は、ご主人の秀成さん

「主人に出会えてよかった」**Q. いつ参加されましたか？**

平成15年8月の会に参加しました。当時実家の商売を手伝っていて、新聞に掲載されていた募集記事を読み参加しました。

Q. 参加しようと思われた動機は何ですか？

お見合いは親から言われ何度かしました。しかし、自分の気持ちとしては結婚はどちらでもよかったし、したい時にしようという気持ちでした。しかしその記事を読み、漁師には男らしいイメージがあったし、大阪では出会えなかったけれど、もしかしたら男らしい人と出会えるかもという思いと、「岩ガキやアワビが食べられます。漁師さんのお嫁さんになりませんか。新鮮な物が食べられますよ」というような一文に惹かれて参加しました（笑）。鳥羽は、大阪から近鉄電車で2時間程度ですし、旅行がてら行ってみようという気持ちで参加しました。

Q. 旅行気分で作られる方は多いのでしょうか？

いいえ、みなさん、真剣です。離島に興味がある人や田舎が好きなどそれぞれ理由は明確にもっておられます。

Q. 結婚を決意された決め手は何ですか？

主人が良かったのです。漁師が良かったのではなく、今の主人に出会えたから良かったのです。決断は早かったですね。

Q. 離島での生活に不安はなかったですか？

私はプラス思考なので、何とかなると考えていました。ただ、地域の人たちが個人的なことも含めて互いの生活をよく知っているということがあります。時にはつらいときもありましたが、主人や鎌田の両親、実家の両親がとても支えになってくれて、感謝でいっぱいです。

Q. 今後どんな工夫があれば良いと思いますか？

嫁いできた女性同士、横のつながりがもっとあると良いと思います。私も答志島、鳥羽にも友達ができまし、その答志島の友人も、この事業で私より3年前に結婚して頑張っているのですが、尊敬できる人で知り合えて良かったと思っています。移住者同士の横のつながりが必要なと思うんですが、意外につながりがないのです。

Q. 今後は、どんなことをしてみたいですか？

島の情報を発信する活動をしている友人から、神島の情報発信もしてみないか、といわれています。彼女にいろいろ教えてもらいながら、いずれ、神島らしいやり方で神島が人々に忘れられないように情報発信をやっていきたくて、活動し始めています。



← ↓平成21年度の取組の様子

今年度から、漁協やコーディネーターだけでなく、鳥羽市が事務局として関わるようになり、対象も島の男性から市内の独身男性に拡大した。

ここ数年は女性のほうが積極的で、男性はなかなかメンバーが集まらず、再募集することもあるとか。

出典)鳥羽市資料



取り組みの成果

成婚率の高まりは、地域の活力へ

1990年から2009年までに、86組の結婚が実現している。もともとの活動でも成果はあったのだが、原氏がコーディネーターとしてお見合い事業に参加することより、成婚率が高まった。

まず、結婚により、子どもの数が増えた。例えば菅島では、1998年に11人の子どもが出生し、1999年にはここ20年ほどで最多の18人が出生している。これにより、菅島の小学校では、違う学年を一緒に教える複式学級を避けることが出来るようになった。

子どもが増えると、島のお年寄りが元気になってきた。やはり、子ども達の賑やかさで活気が生まれ、それを目にする人たちにも元気を与えるのであろう。

そして島外から花嫁が来ることで、島外の目で島の魅力を新たに発見できること、そして生活面での改善などが進むこと、などがある。島外の花嫁の意見が新鮮で、刺激を受けたという。

島外から嫁いできた花嫁が中心となって運営

している組織が答志島の「島の旅社」だ。体験ツアーや出版物で離島の良さを発信するなど、島外から来た者の視点で、島の資源マップを作成したり歴史を活用したイベントを企画したりしている。島の旅社の取り組みの中では、無人島で干潟生物を観察する「浮島自然水族館」の評価が高い。

今後の展望

活動はさらに拡大し、市全域へ

これまでは漁業者の後継者対策といった視点で漁協などを中心に取り組みが進められてきた。後継者不足は市全体の課題であることから、今後は、こうした活動のノウハウを市域全体に広げたいというのが市の考えだ。

「海辺のまち鳥羽出逢い応援事業」として、副市長を実行委員長に、商工会議所、鳥羽磯部漁業協同組合、鳥羽志摩農業協同組合、鳥羽市観光協会、自治会連合会などの代表が参画して実行委員会を設置し、市内在住の独身男性並びに県内外の独身女性を対象に一泊二日の交流事業を2009年度より実施している。

↑ 鳥羽市の発行するパンフレット
出典) 鳥羽市 HP
<http://www.city.toba.mie.jp/kakuka/kikaku/deaiouen/joseiboshuu.htm> (2010/03/26 参照)

↑ 島に嫁いできた方の運営する「島の旅社」
答志島の情報をホームページで提供するほか、「浮島自然水族館」では船で無人島へ渡り、潮が引いたときに現れる磯場で様々な生きものを観察することができる。
出典) 島の旅社 HP
<http://www.shima-tabi.net/> (2010/03/26 参照)

これまでは漁業体験を中心に据えてきたが、今回は漁業に限らないということで、体験内容も、漁業者有利にならないよう、つまり漁業者以外も魅力が発揮できるよう工夫されているようだ。

コーディネーターとして原氏に引き続き参画願ひ、その指導のもとに事業を展開する。行政が主催となっても、個人との面接や事業後の参加者の相談など、きめ細かなフォローは行政ではなかなか出来ない。そのあたりをコーディネーターに担ってもらう。

初年度の今年は、男性30名の応募に対し、女性は90名余りほどの応募があったという。原氏が個人面談を行い、今回の参加者を絞り込む。知らない土地で生活することになる、結婚という人生の重大時に、これまで間に入ってたくさんの方

例を見てきたノウハウによって、今回の活動に参加してもらおう人を見いだす。今回参加に至らない応募者についても、鳥羽市のファンになってもらえるよう今後の情報発信につなげていきたい、と原氏は語る。

双方が真に幸せとなる、また、それによって地域に定住者・後継者が増え、新しい目線で地域に新たな活動を生み出す、そんな活性化につながるカップルの成立を念頭において、鳥羽市の取り組みは続いていく。